

(5) インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

年間患者数は66,751人（定点あたり335.48人）で、昨年の43,699人（219.72人）より増加した。週別定点あたり患者数は5週（2月上旬）に定点あたり30人を超えて警報レベルとなり、9週（3月上旬）に最大のピーク（41.20人）を示した後、速やかに減少して、14週（4月上旬）には定点あたり10人を、18週（5月上旬）には定点あたり1.0人を下回った。また、年末47週（11月下旬）から流行開始の目安とされる定点あたり1.0人を超えて流行期に入った。

当研究所で行った検査ではA(H1N1)pdm09、A(H3N2)型、B型（Yamagata系統）及びB型（Victoria系統）のインフルエンザウイルスを269件検出した。年初から4週（1月下旬）は主にA(H1N1)pdm09を、5週から9週（3月上旬）は複数の型を検出し、その後21週（5月下旬）にかけて主にB型の検出が継続した。また、39週（9月下旬）から年末までは、主にA(H3N2)型を検出した。

年齢階級別患者発生割合では、9歳以下の患者が全体の55%、14歳以下の患者が全体の74%を占めていた。

図7-1 インフルエンザの週別定点あたり患者発生状況

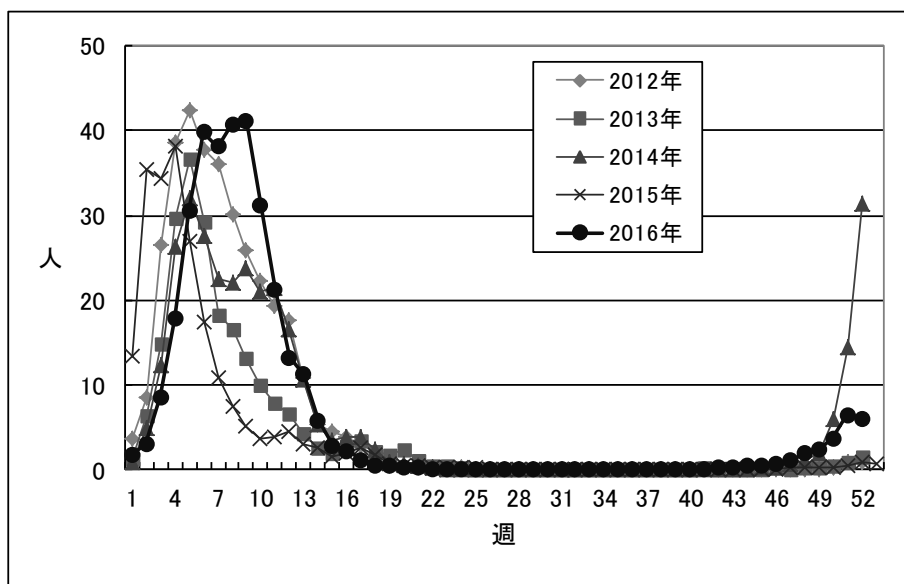
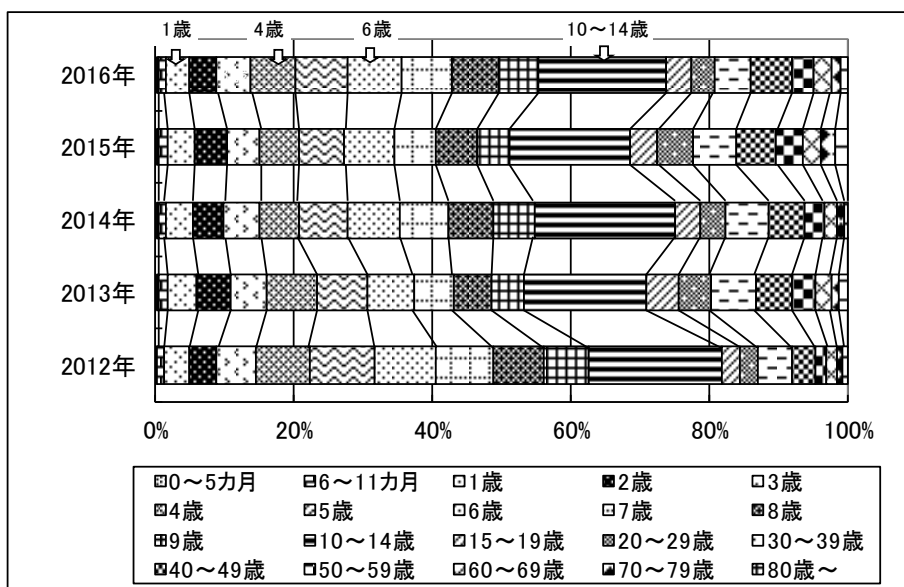


図7-2 インフルエンザの年齢階級別患者発生割合



(6) RSウイルス感染症

本疾病は2003年11月に小児科定点対象疾病となった。患者報告には検査診断が必要だが、2011年10月より迅速診断キットによる抗原検査の保険適用が拡大され、従来入院患者に加えて外来患者の乳児（1歳未満）等にも適用可能となっている。

2016年の年間患者数は4,068人（定点あたり31.53人）で、過去最大であった昨年の5,112人（39.64人）より減少した。

週別定点あたり患者数は35週（9月上旬）から増加し始め、40週（10月上旬）に最大のピーク（1.63人）を示した後、年末まで患者数の多い状態で推移した。

年齢階級別患者発生割合では、0歳の患者が全体の38%、1歳以下の患者が70%、2歳以下の患者が87%を占めていた。

図8-1 RSウイルス感染症の週別定点あたり患者発生状況

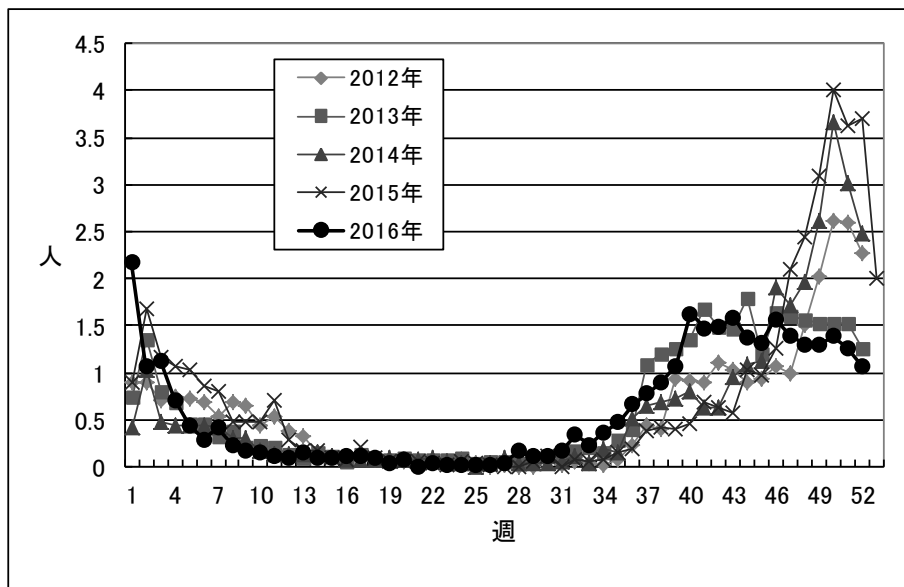
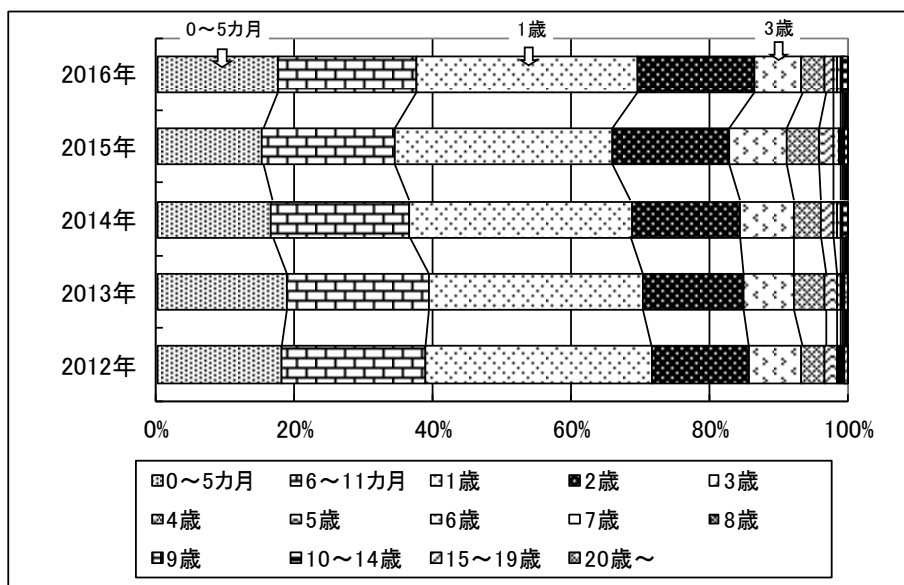


図8-2 RSウイルス感染症の年齢階級別患者発生割合



(7) 咽頭結膜熱

年間患者数は3,023人（定点あたり23.42人）で、昨年の3,402人（26.42人）より減少した。

例年は夏に患者数が増加するが、2016年は7週（2月中旬）、24週（6月中旬）、35週（9月上旬）及び50週（12月中旬）に定点あたり患者数0.6人程度のピークを示しながら、大きな流行はなく推移した。

年齢階級別患者発生割合は1歳22%、2歳15%、3歳15%、4歳12%、5歳10%の順で多く、0～5歳の患者が全体の79%、0～9歳の患者が全体の95%を占めていた。

図9-1 咽頭結膜熱の週別定点あたり患者発生状況

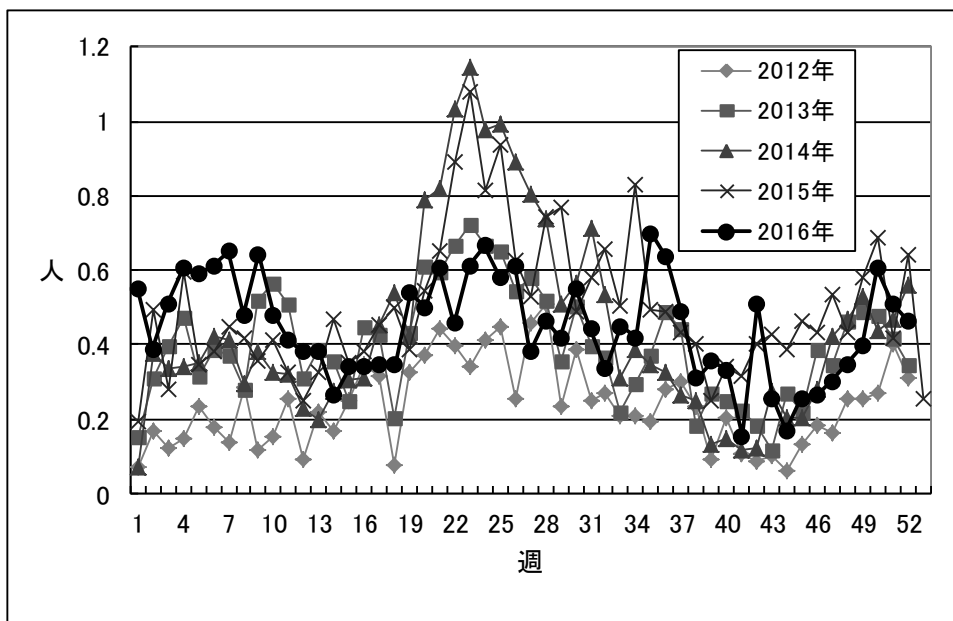
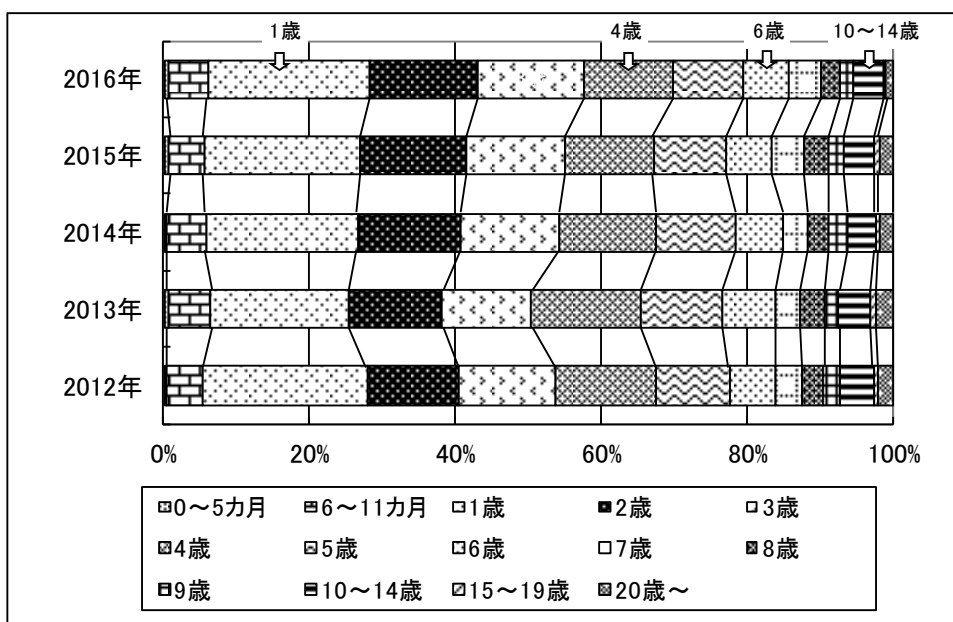


図9-2 咽頭結膜熱の年齢階級別患者発生割合



(8) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

年間患者数は9,984人（定点あたり77.33人）で、昨年の13,444人（104.38人）より減少した。

例年冬期から初夏に患者数の多い疾病であり、2016年の週別定点あたり患者数は、4週（1月下旬）と21週（5月下旬）にピーク（2.3～2.5人）を示した後、28週（7月中旬）以降は、比較的患者数が少ない状態が続いた。

年齢階級別患者発生割合は5歳14%、4歳12%、6歳12%、7歳10%、3歳10%の順で多く、1～9歳の患者が全体の82%、1～14歳の患者が全体の94%を占めていた。

図10-1 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の週別定点あたり患者発生状況

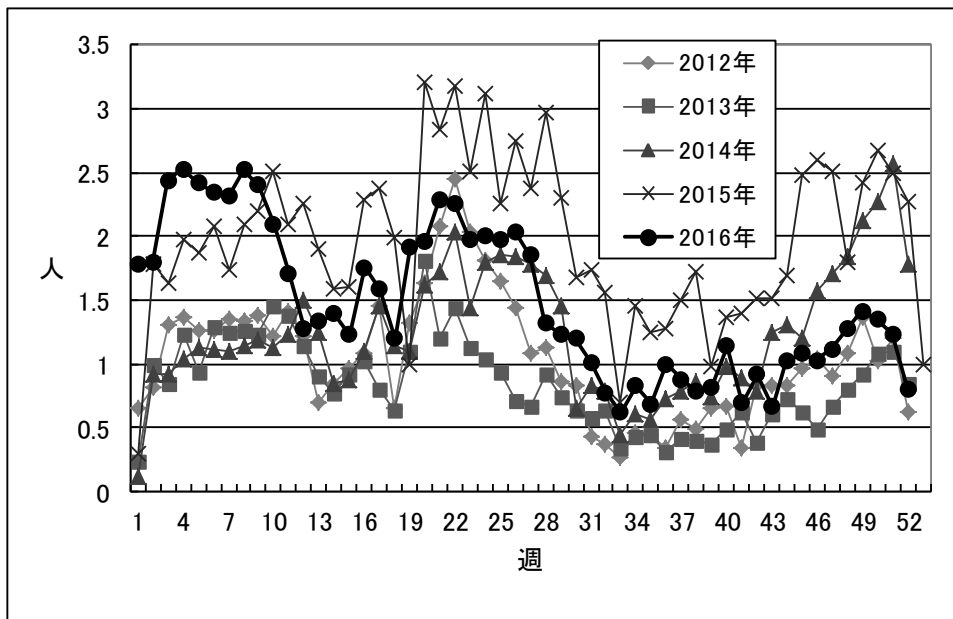
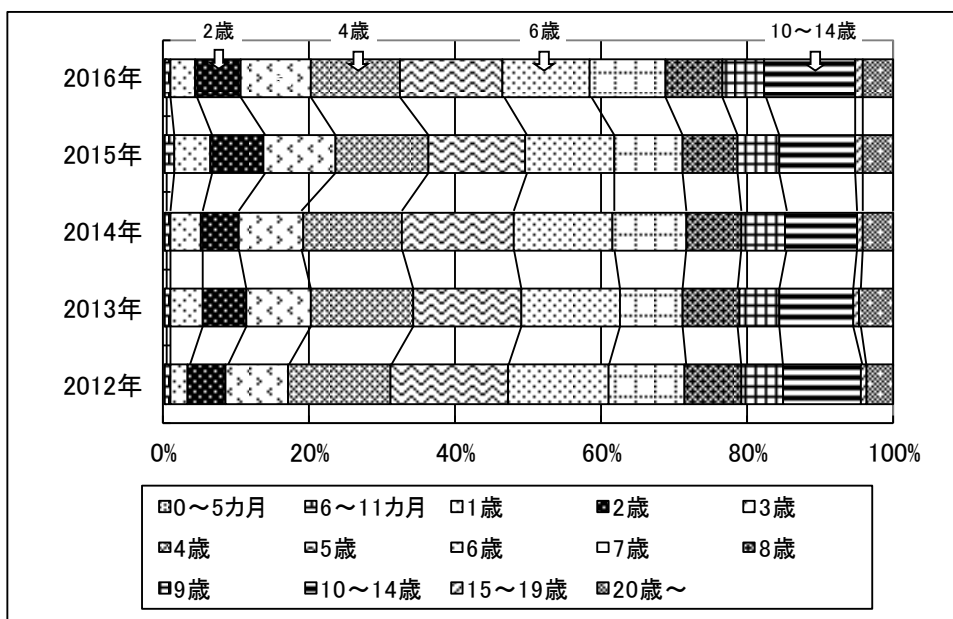


図10-2 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の年齢階級別患者発生割合



(9) 感染性胃腸炎

年間患者数は53,815人（定点あたり416.92人）で、昨年の49,328人（382.97人）より増加した。

週別定点あたり患者数は、1週（1月上旬）から26週（6月下旬）まで、大型連休期間中の18週には患者数の落ち込みがみられたが、ほぼ横ばいで推移した。その後、秋期に向けて減少したが、44週（11月上旬）以降に増加し、48週（12月上旬）には警報レベル開始基準値である20人を超え、50週（12月中旬）にピーク（24.38人）を示した。

年齢階級別患者発生割合は1歳13%、4歳11%、2歳10%、3歳10%、5歳10%の順で多く、0～5歳の患者が全体の60%、0～9歳の患者が全体の81%を占めていた。

図11-1 感染性胃腸炎の週別定点あたり患者発生状況

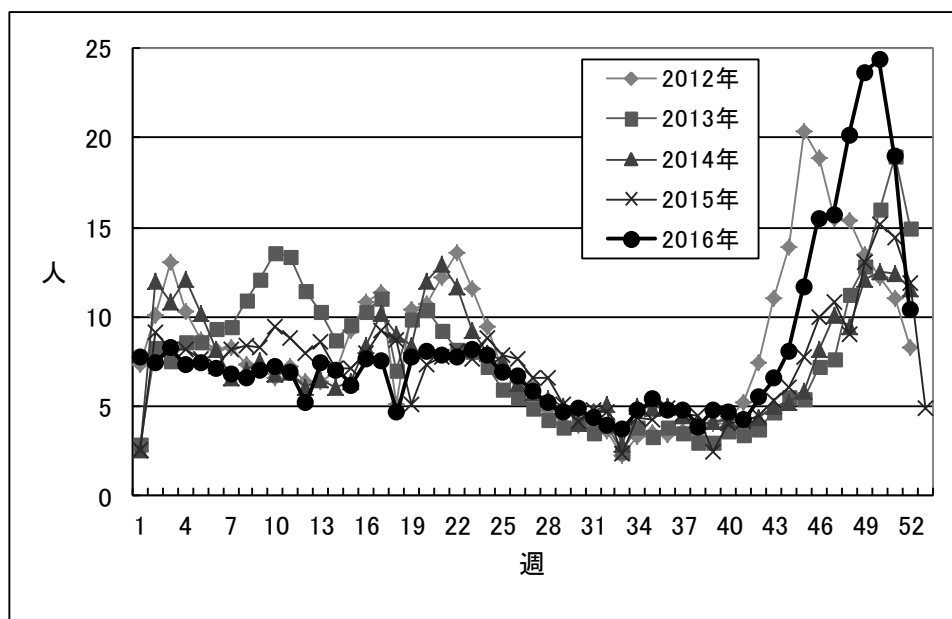
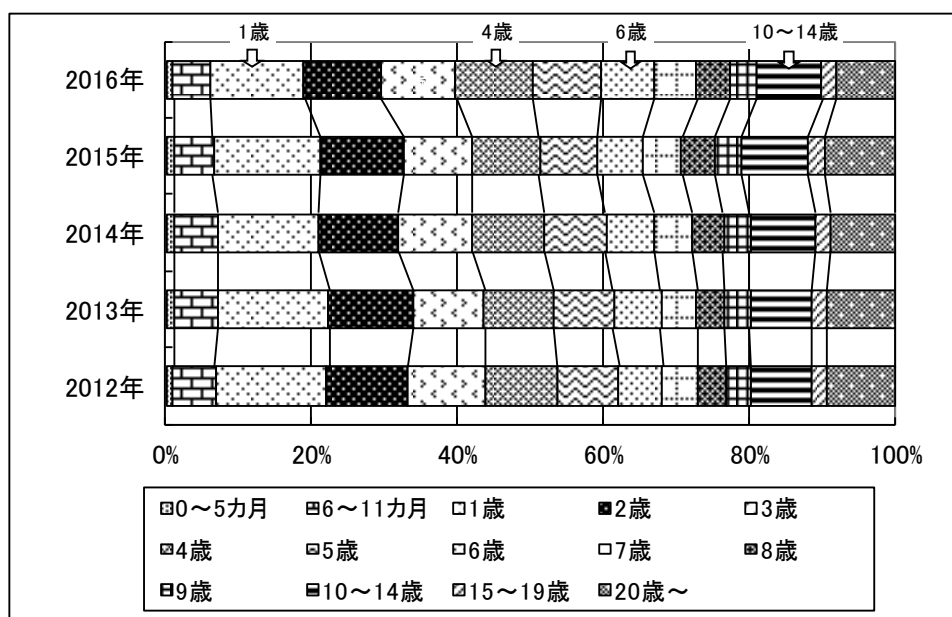


図11-2 感染性胃腸炎の年齢階級別患者発生割合



(10) 水痘

年間患者数は2,903人（定点あたり22.49人）で、昨年の3,258人（25.29人）より減少した。

2014年10月1日から水痘ワクチンが定期接種化され、これに先立って、2014年9月19日から24時間以上の入院を要した水痘症例が全数届出対象となった。

2015～2016年の小児科定点からの週別定点あたり患者数は、ワクチン接種の効果によるものか、以前よりも少なく、小さい変動で推移している。

年齢階級別患者発生割合は5歳17%、4歳14%、6歳13%、7歳9%、3歳8%の順で多く、0～7歳の患者が全体の81%を占めていた。昨年よりも、2～4歳の患者割合が減少した。

図12-1 水痘の週別定点あたり患者発生状況

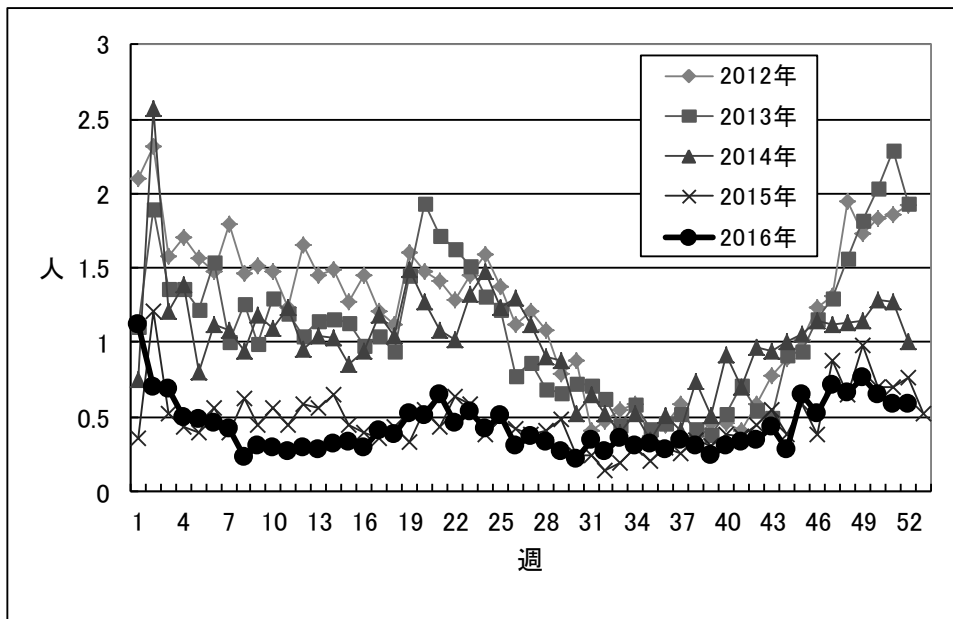
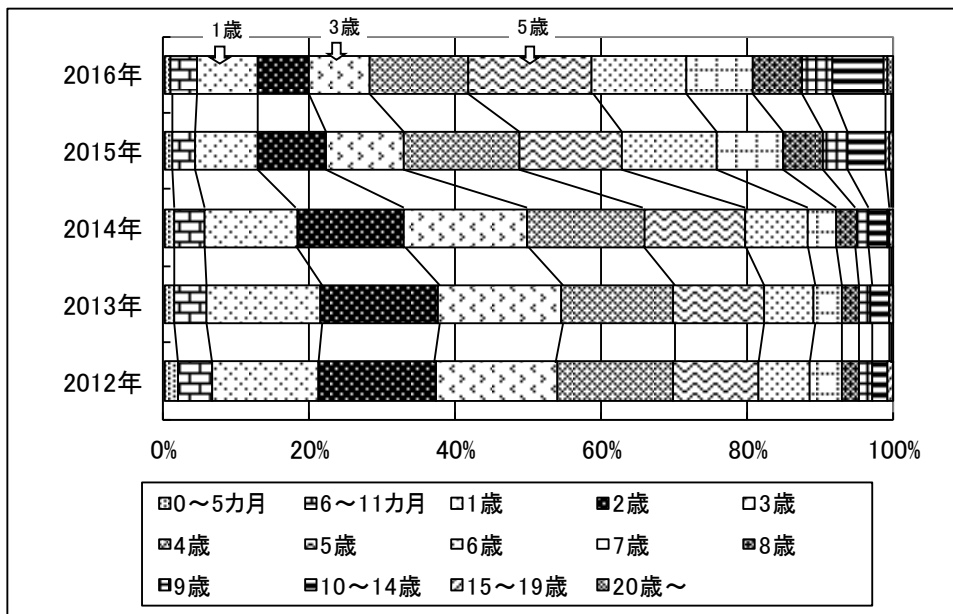


図12-2 水痘の年齢階級別患者発生割合



(11) 手足口病

年間患者数は1,475人（定点あたり11.43人）で、昨年の患者数18,344人（142.42人）より大幅に減少し、一昨年の患者数とほぼ等しくなった。

週別定点あたり患者数は、27週（7月上旬）の0.64人を最高に、1年を通じて患者数が少ない状態で推移した。

年齢階級別患者発生割合は1歳30%、2歳20%、3歳11%、4歳11%、5歳8%の順で多く、0～5歳の患者が全体の89%を占めていた。

当研究所で行った検査では、主にコクサッキーウイルスA6型（CA6）が検出された。

図13-1 手足口病の週別定点あたり患者発生状況

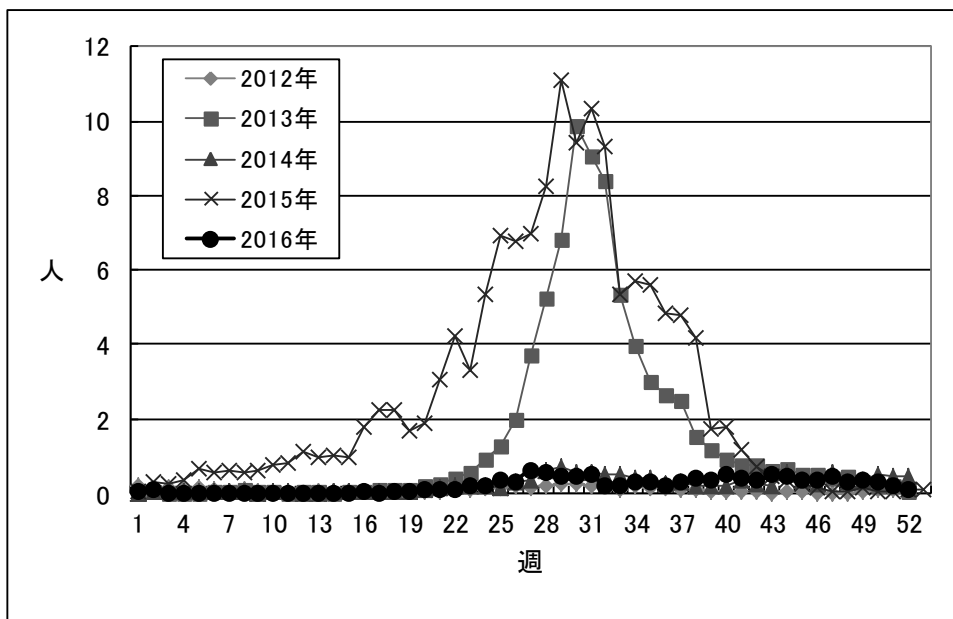
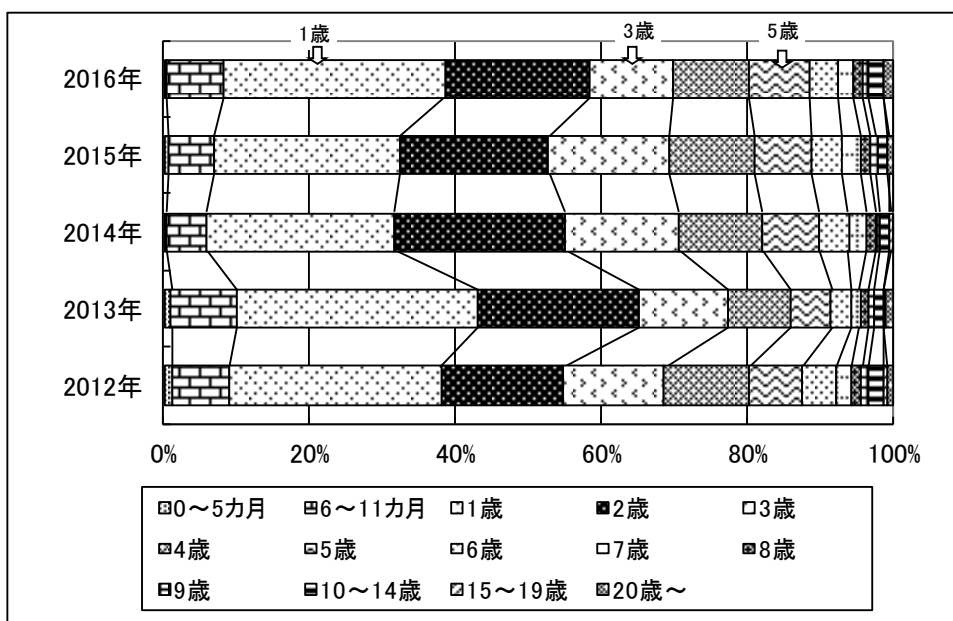


図13-2 手足口病の年齢階級別患者発生割合



(12) 伝染性紅斑

年間患者数は1,723人（定点あたり13.35人）で、昨年の2,867人（22.26人）より減少した。

週別定点あたり患者数は、2週（1月中旬）の0.63人をピークに減少傾向を示し、30週（7月下旬）以降は0.20人未満で推移した。

年齢階級別患者発生割合は5歳18%、4歳15%、6歳14%、7歳10%、3歳9%の順で多く、0～9歳の患者が全体の93%を占めていた。

図14-1 伝染性紅斑の週別定点あたり患者発生状況

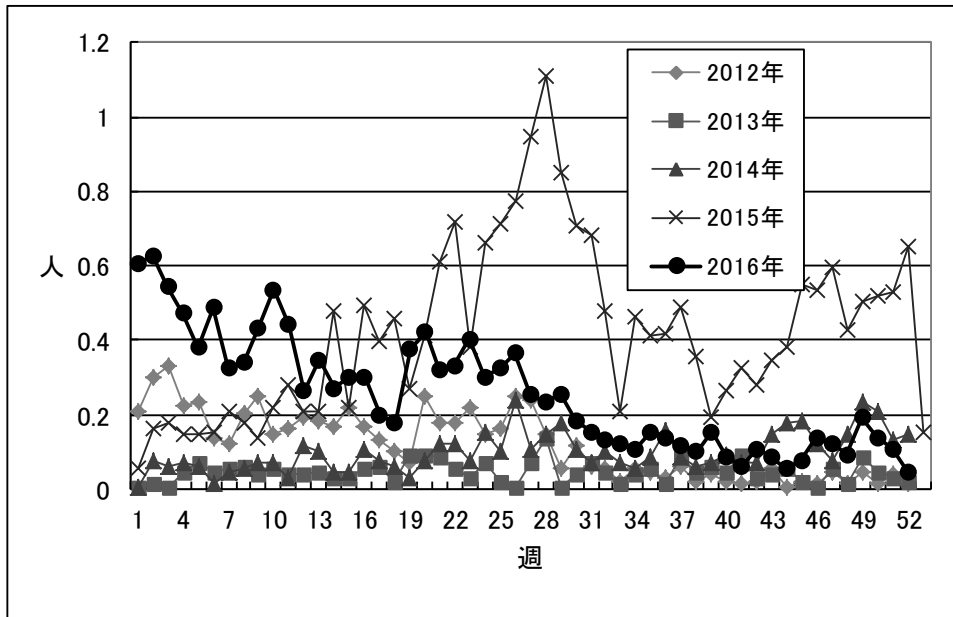
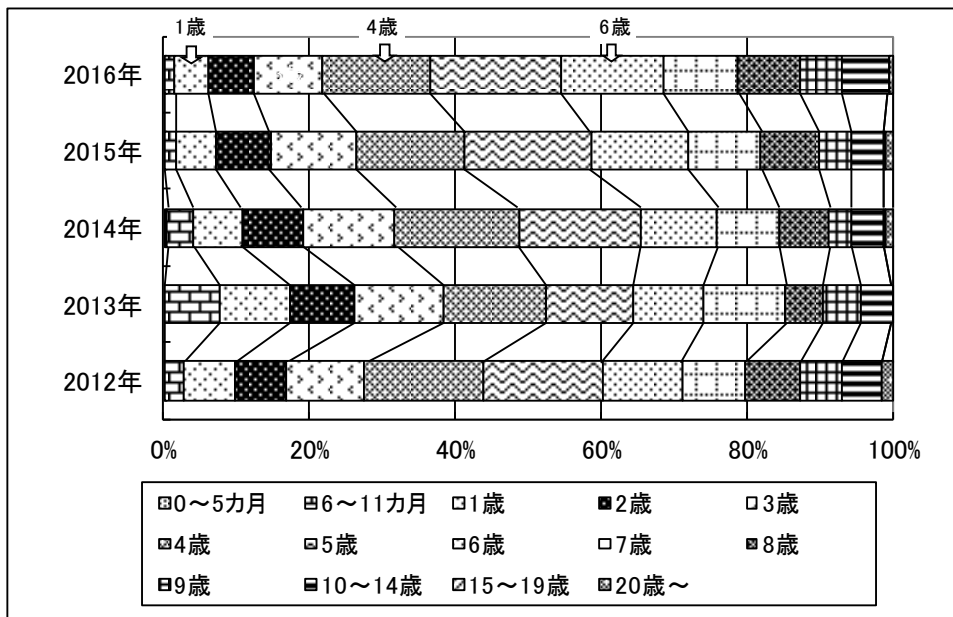


図14-2 伝染性紅斑の年齢階級別患者発生割合



(13) 突発性発しん

年間患者数は2,680人（定点あたり20.76人）で、昨年の3,040人（23.60人）より減少した。年間患者数の経年的推移に多少のバラツキはみられるが、2000年以降緩やかな減少傾向を続けている。本疾病は1年を通じて患者が発生し、季節性が明瞭でない。週別定点あたり患者数は、0.20～0.61人の間で推移した。

年齢階級別患者発生割合は、0歳が41%、1歳が48%、2歳が8%を占めていた。

図15-1 突発性発しんの週別定点あたり患者発生状況

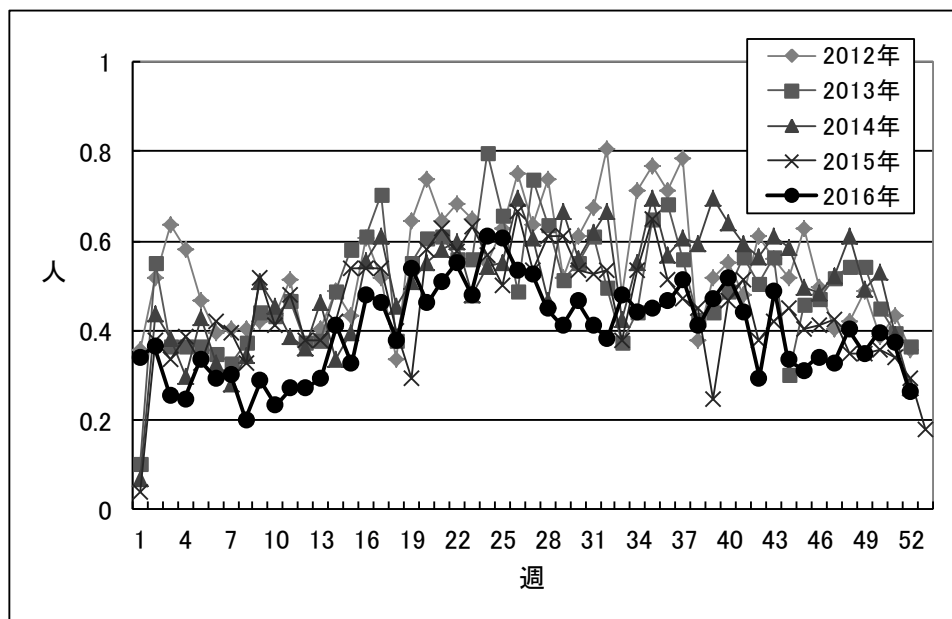
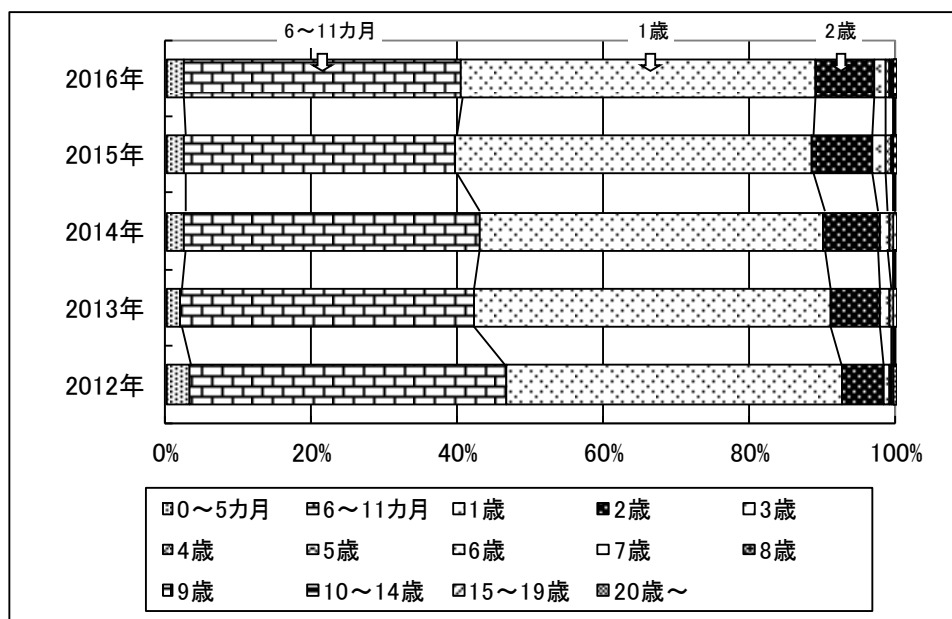


図15-2 突発性発しんの年齢階級別患者発生割合



(14) 百日咳

本疾病は患者発生数が比較的少ない疾病である。2016年の年間患者数は102人（定点あたり0.79人）で、昨年（2015年）の132人（1.02人）より減少した。

週別定点あたり患者数は、0.00～0.06人の間で推移した。

年齢階級別患者発生割合は、0歳15%、1～4歳25%、5～9歳28%、10歳代22%、20歳以上10%となり、小児科定点からの報告にもかかわらず成人患者の発生割合も10%を占めていた。

図16-1 百日咳の週別定点あたり患者発生状況

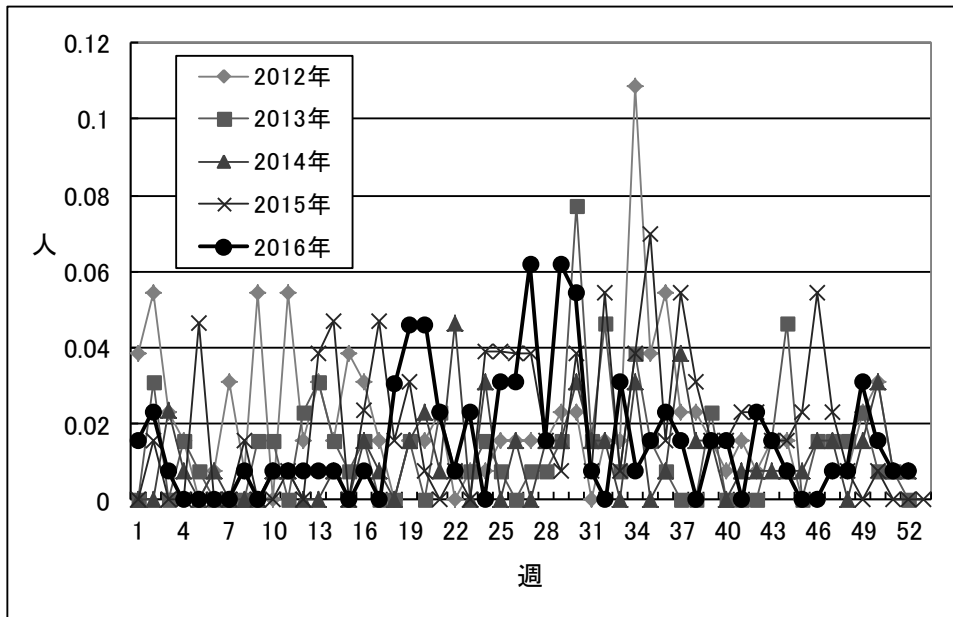
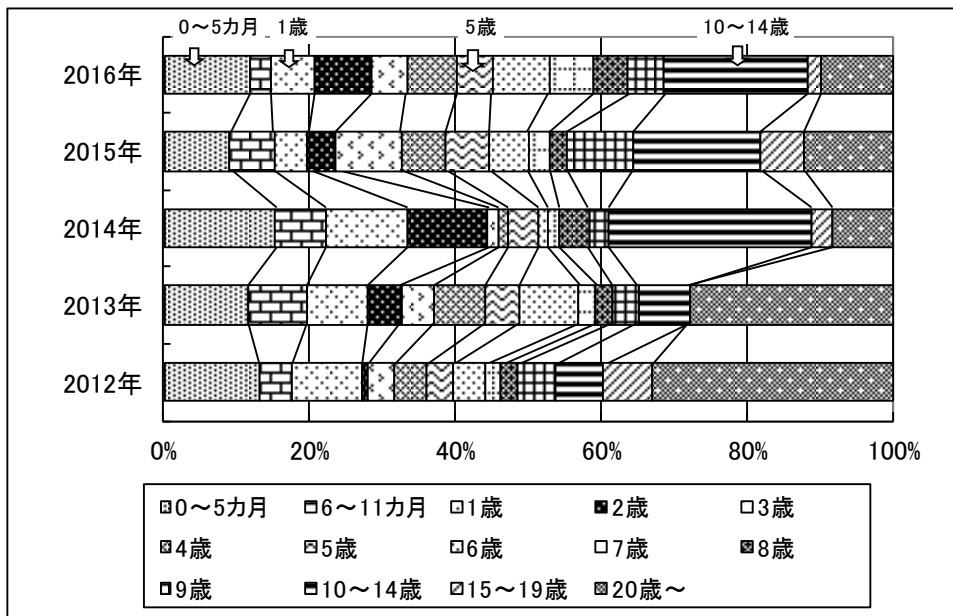


図16-2 百日咳の年齢階級別患者発生割合



(15) ヘルパンギーナ

年間患者数は4,276人（定点あたり33.16人）で、昨年の2,883人（22.36人）より増加した。

週別定点あたり患者数は、21週（5月下旬）頃から増加が始まり、28週（7月中旬）にピーク（5.41人）を示した後減少に転じ、48週（12月上旬）頃に終息した。

年齢階級別患者発生割合は1歳28%、2歳22%、3歳14%、4歳11%、0歳8%の順で多く、0～5歳の患者が全体の91%を占めていた。

図17-1 ヘルパンギーナの週別定点あたり患者発生状況

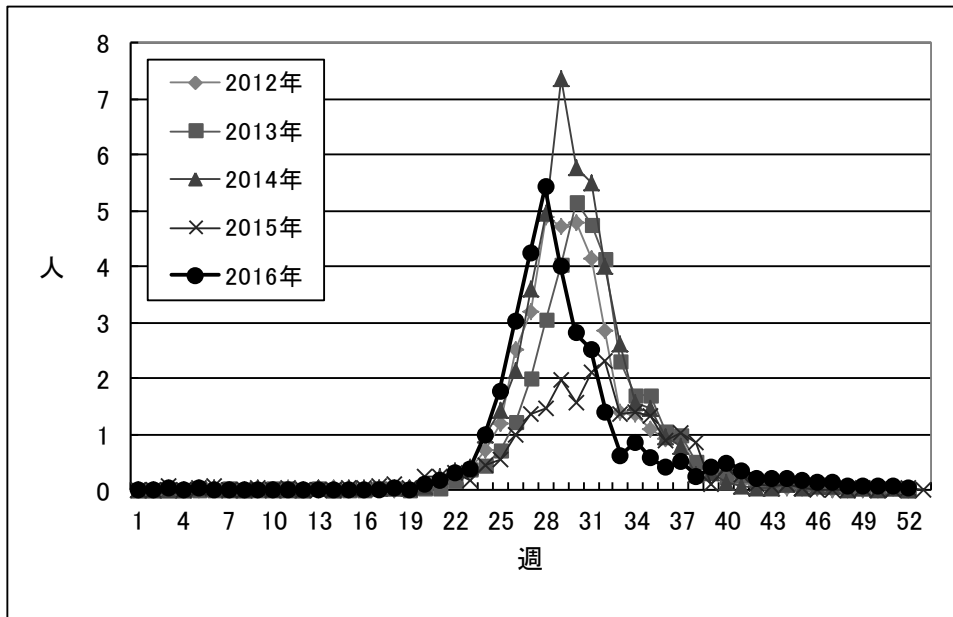
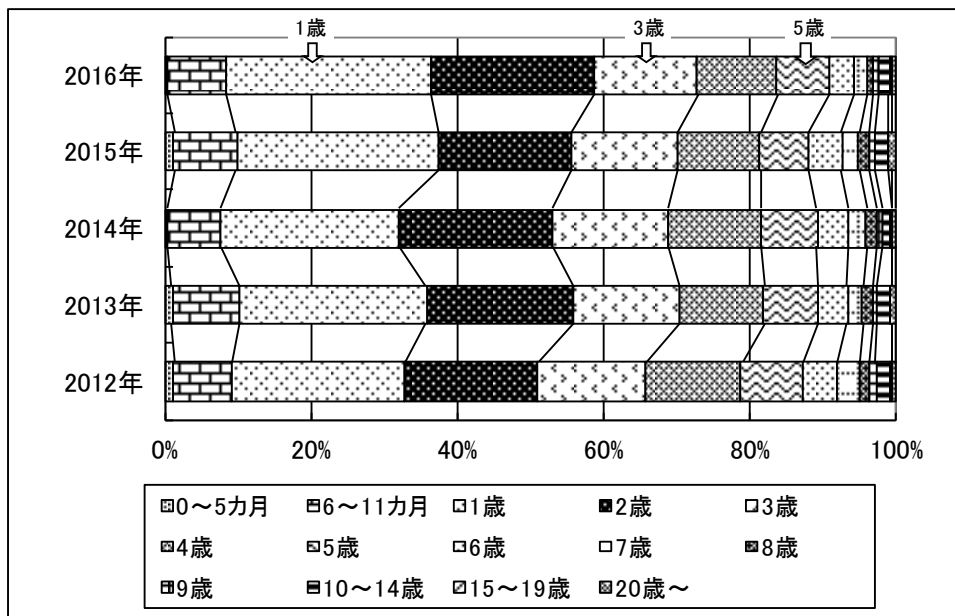


図17-2 ヘルパンギーナの年齢階級別患者発生割合



(16) 流行性耳下腺炎

年間患者数は7,799人（定点あたり60.43人）で、昨年の2,624人（20.36人）の約3倍に増加し、5年ぶりの流行となった。

週別定点あたり患者発生状況をみると、2015年43週（10月下旬）から増加傾向が続き、2016年42週（10月中旬）にピーク（1.98人）を示した後、減少に転じた。

年齢階級別患者発生割合は5歳17%、4歳14%、6歳14%、7歳11%、3歳10%の順で多く、2～9歳の患者が全体の86%を占めていた。

図18-1 流行性耳下腺炎の週別定点あたり患者発生状況

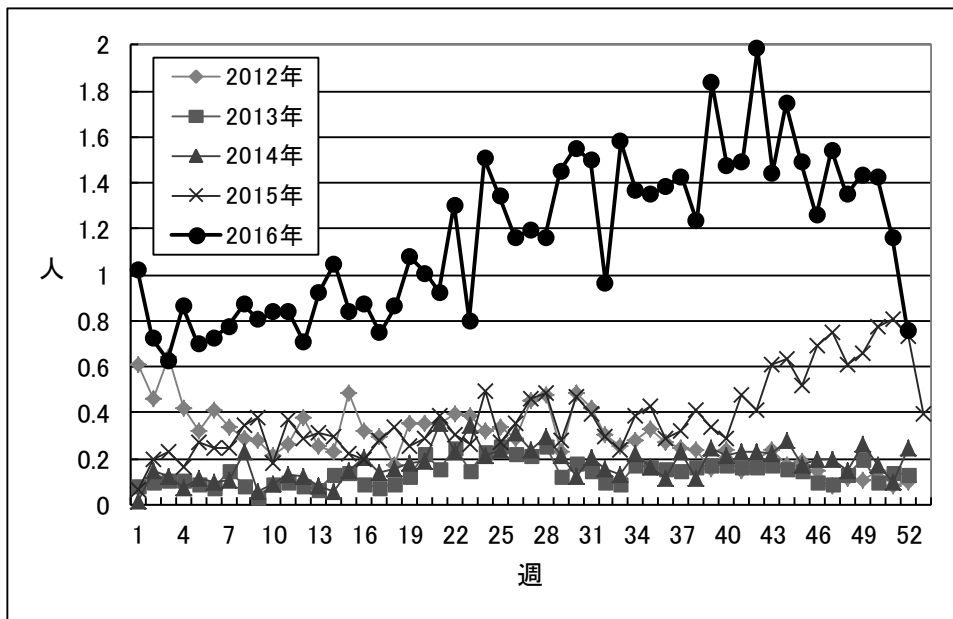
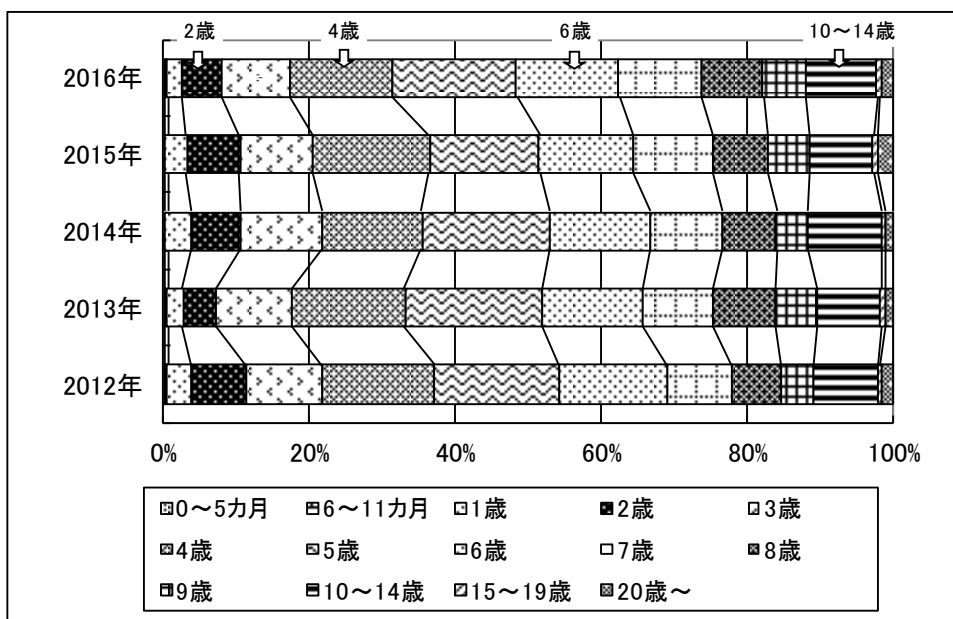


図18-2 流行性耳下腺炎の年齢階級別患者発生割合



(17) 急性出血性結膜炎

本疾病は、2007年以降患者数の少ない状態で推移している。2016年の年間患者数は15人（定点あたり0.43人）で、昨年（2015年）の19人（0.54人）より減少した。

年齢階級別患者発生割合は30歳代が27%と最も多くなり、20歳以上の患者が全体の87%を占めていた。

図19-1 急性出血性結膜炎の週別定点あたり患者発生状況

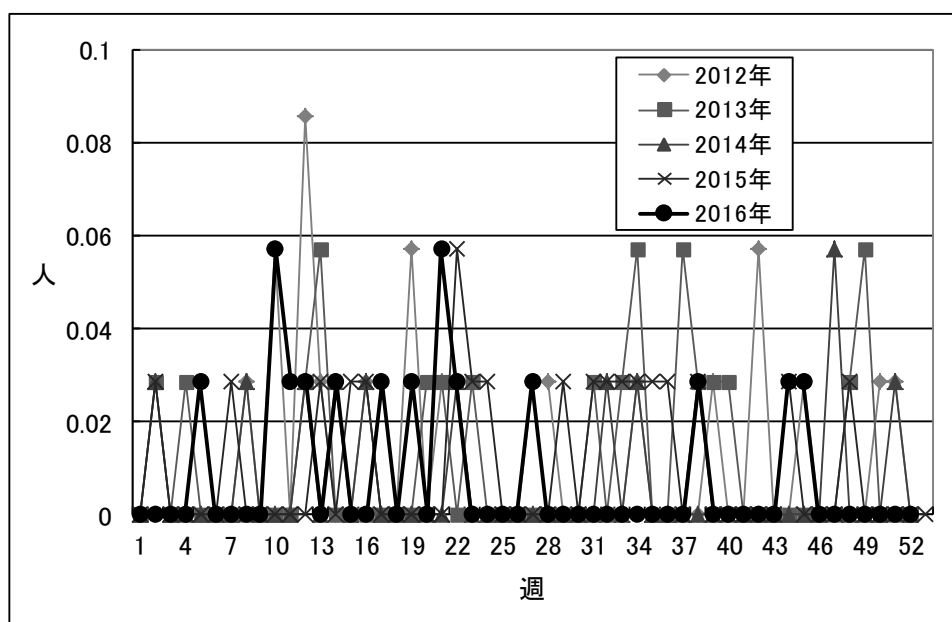
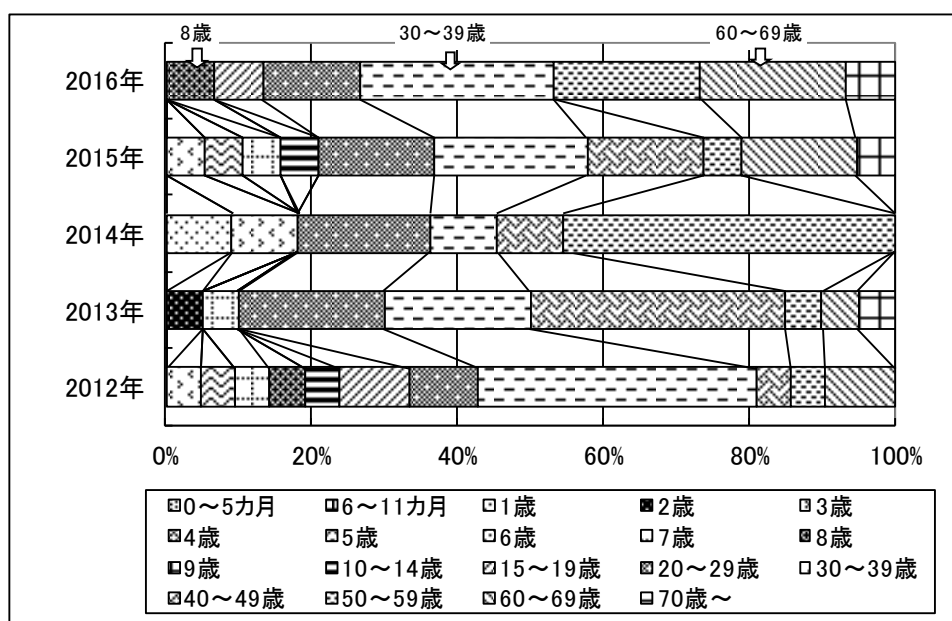


図19-2 急性出血性結膜炎の年齢階級別患者発生割合



(18) 流行性角結膜炎

年間患者数は706人（定点あたり20.20人）で、昨年の1,473人（42.09人）より半減した。
 定点あたり患者数の週別変化に季節性は見られず、0.17～0.63人の間で推移した。

年齢階級別患者発生割合は0～9歳28%、30歳代20%がやや多いが、各年齢層で患者が発生していた。

図20-1 流行性角結膜炎の週別定点あたり患者発生状況

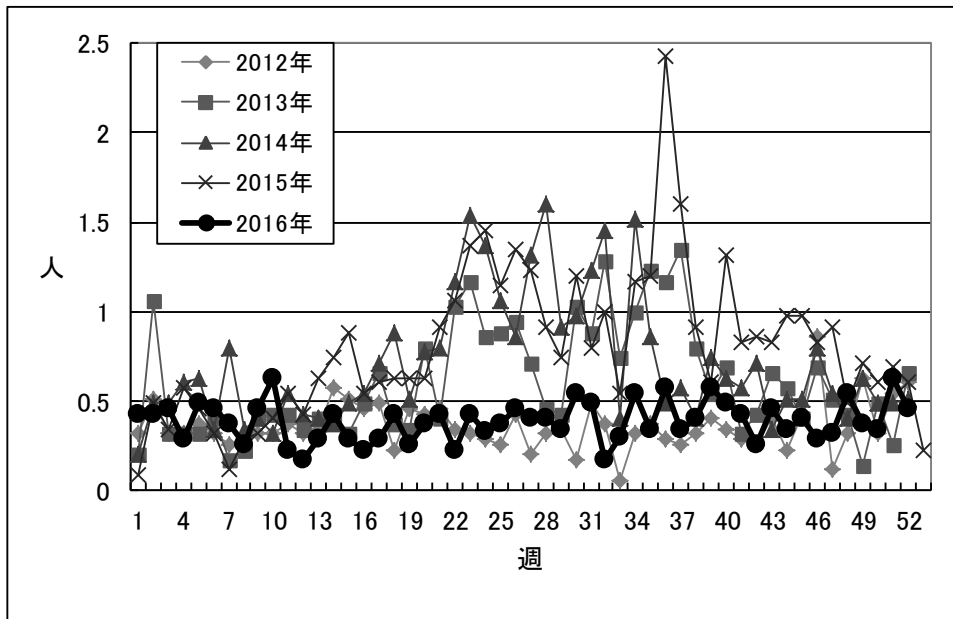
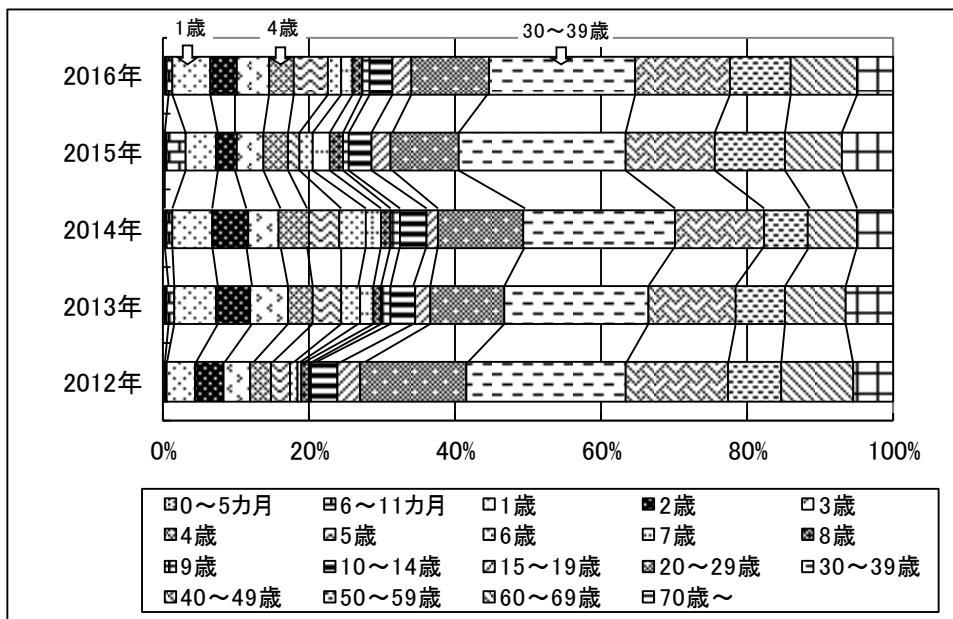


図20-2 流行性角結膜炎の年齢階級別患者発生割合



(19) 細菌性髄膜炎（インフルエンザ菌、髄膜炎菌、肺炎球菌を原因として同定された場合を除く）
 年間患者数は33人（定点あたり2.36人）で、昨年の18人（1.29人）より増加し、一昨年と同レベルとなった。

患者の年齢分布は70歳以上が13人（39%）、55～59歳と60～64歳が各4人（12%）、0歳と5～9歳が各3人（9%）の順となっていた。

図 21-1 細菌性髄膜炎の週別定点あたり患者発生状況

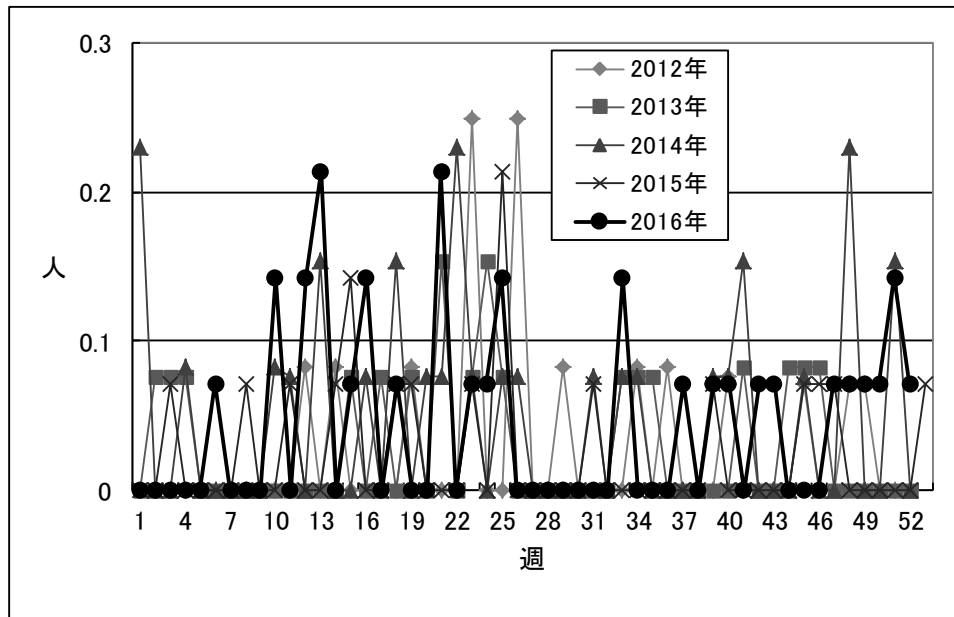
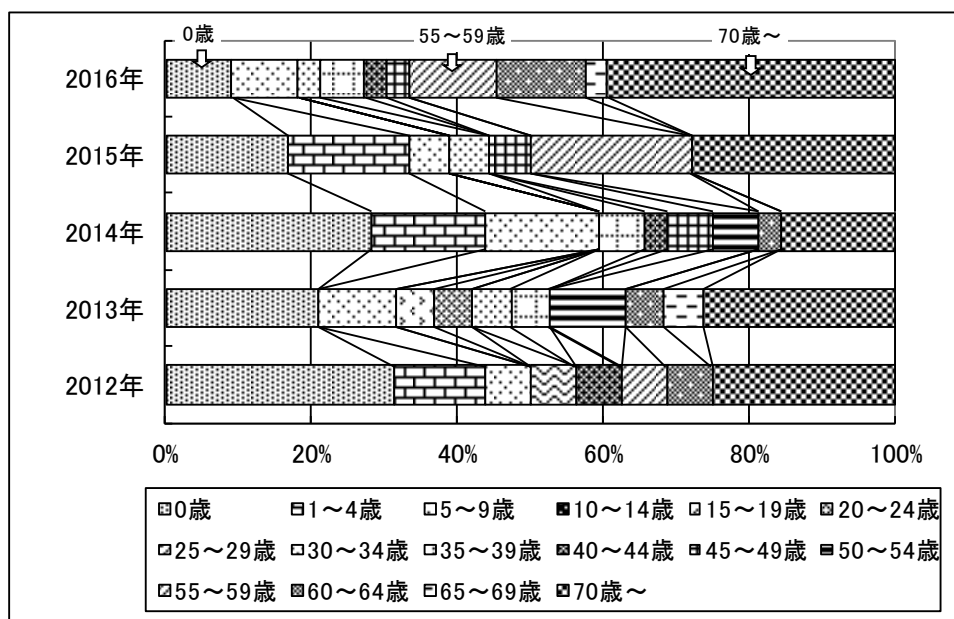


図 21-2 細菌性髄膜炎の年齢階級別患者発生割合



(20) 無菌性髄膜炎

年間患者数は2004年以降20～61人の範囲で増減を繰り返しており、2016年は50人（定点あたり3.57人）で、昨年の42人（3.01人）より増加した。

患者の年齢分布は0歳9人（18%）、5～9歳8人（16%）、25～29歳6人（12%）の順となっていた。

図 22-1 無菌性髄膜炎の週別定点あたり患者発生状況

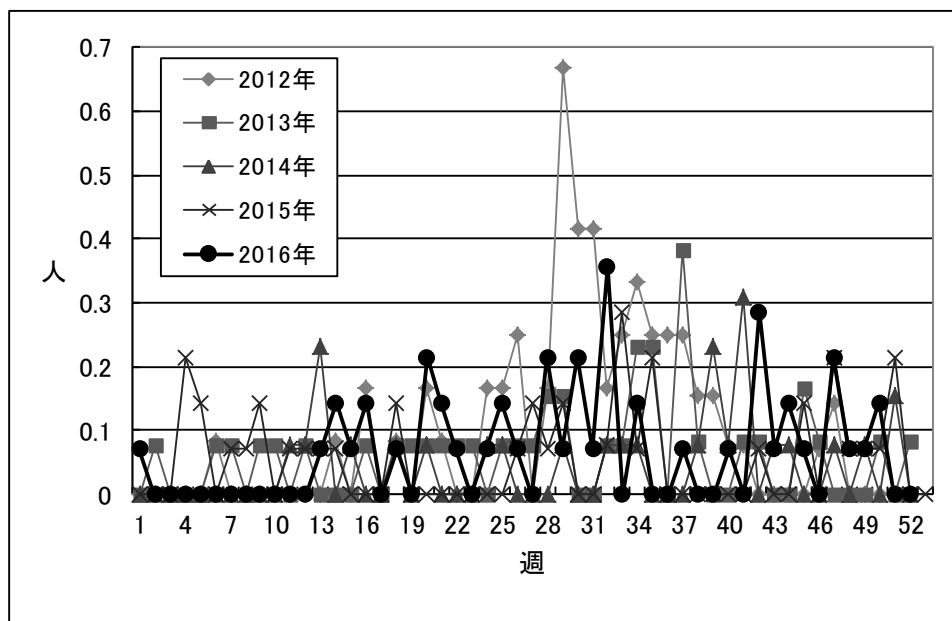
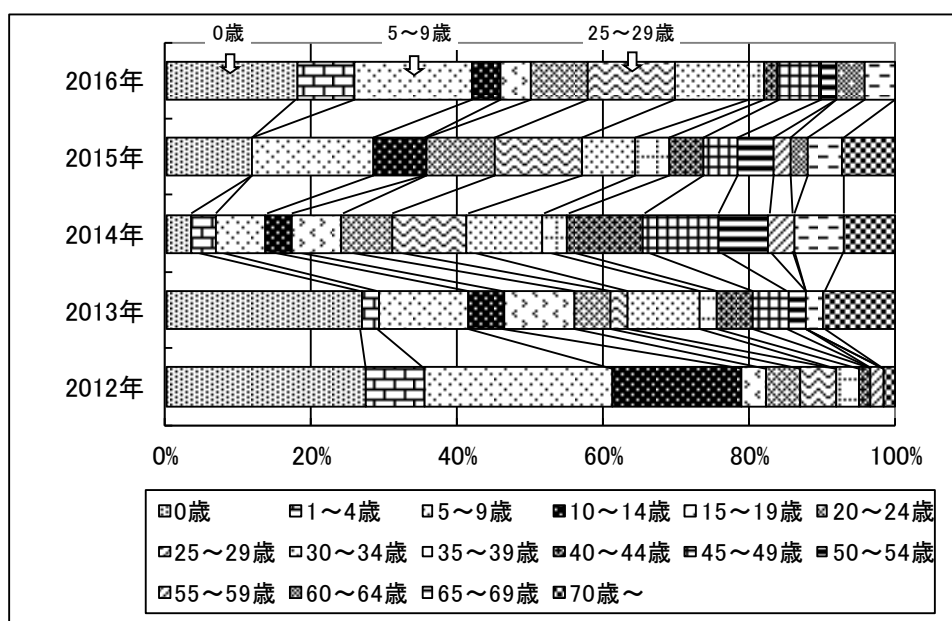


図 22-2 無菌性髄膜炎の年齢階級別患者発生割合



(21) マイコプラズマ肺炎

年間患者数は508人（定点あたり36.29人）で、昨年の191人（13.67人）の3倍近くまで増加し、4年ぶりの流行となった。

週別定点あたり患者数は、29週（7月下旬）以降一段と増加し、40週（10月上旬）にピーク（2.00人）を示した。

年齢階級別患者発生割合は5～9歳32%、1～4歳28%、10～14歳18%の順で多く、15歳未満の患者が全体の79%を占めていた。

図 23-1 マイコプラズマ肺炎の週別定点あたり患者発生状況

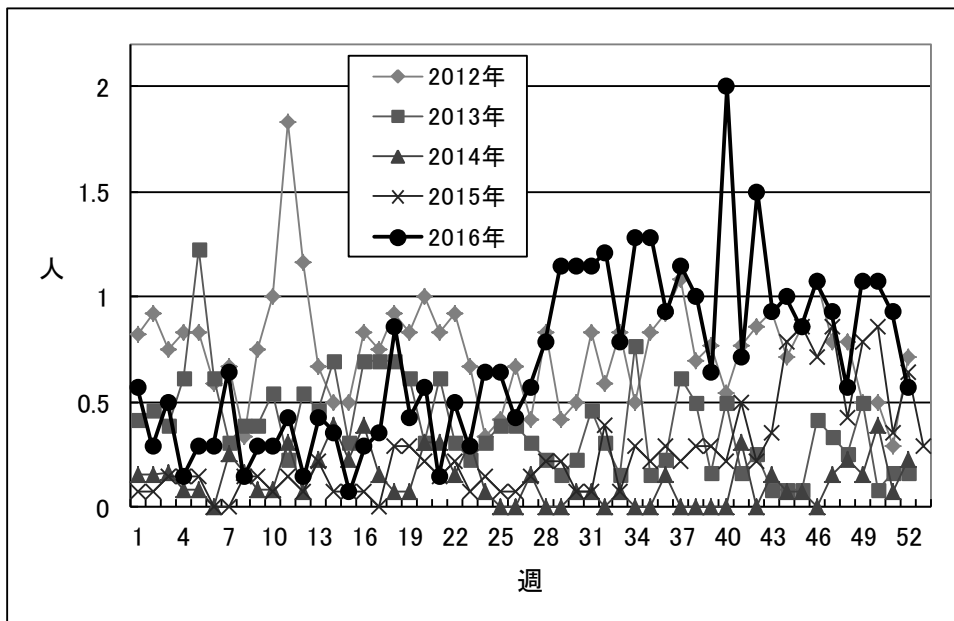
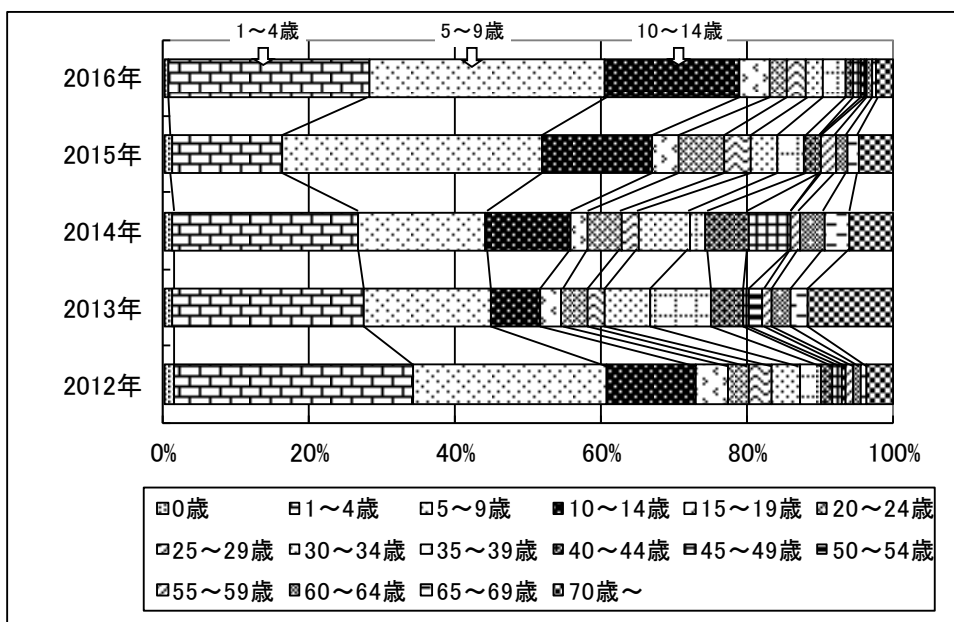


図 23-2 マイコプラズマ肺炎の年齢階級別患者発生割合



(22) クラミジア肺炎（オウム病を除く）

年間患者数は1人（定点あたり0.07人）で、10週（3月上旬）に5～9歳の女性患者が発生した。2012年には年間25人の患者があったが、2014年は発生がなく、2015年以降は1人と少ない状況が続いている。

図 24-1 クラミジア肺炎（オウム病を除く）の週別定点あたり患者発生状況

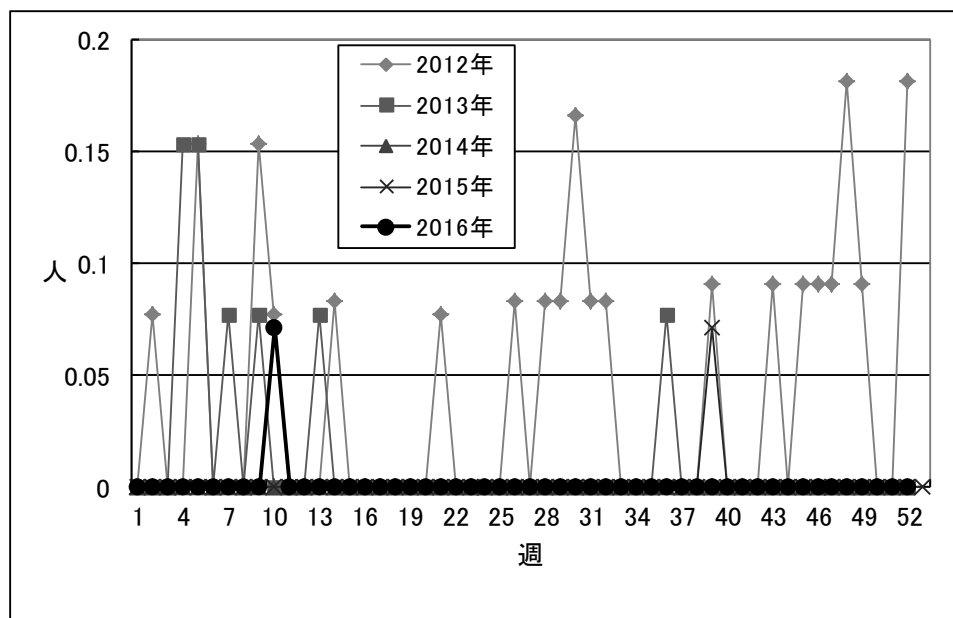
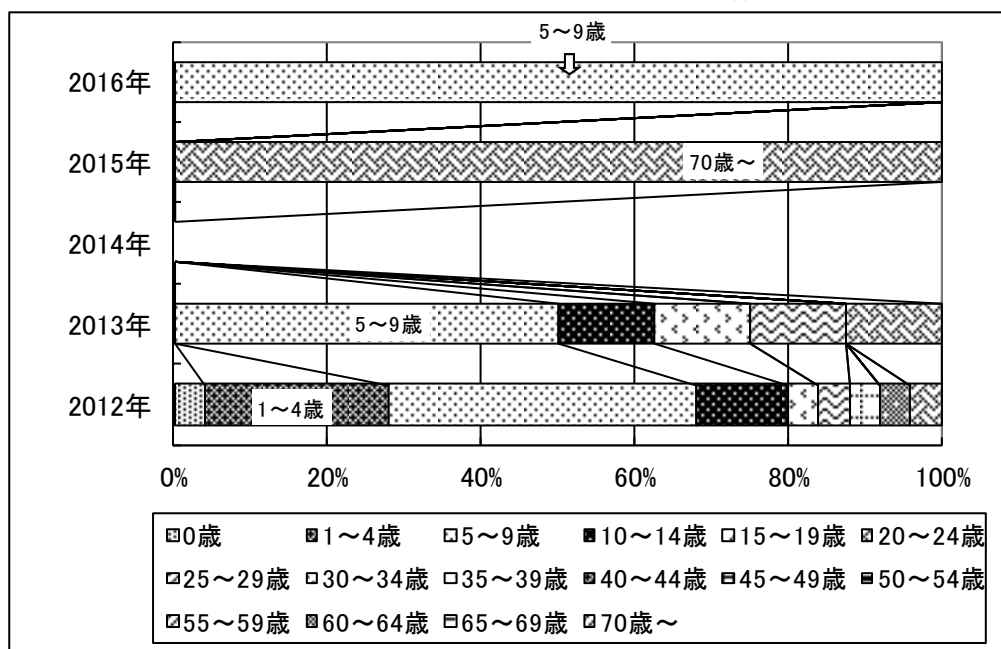


図 24-2 クラミジア肺炎（オウム病を除く）の年齢階級別患者発生割合



(23) 感染性胃腸炎（病原体がロタウイルスであるものに限る）

本疾病は2013年10月24日より基幹定点対象疾病に追加された。2016年の年間患者数は200人（定点あたり14.29人）で、昨年の94人（6.71人）より倍増した。

週別定点あたり患者数は9週（3月上旬）をピーク（1.36人）に、4週（1月下旬）から20週（5月中旬）に多くなった。

年齢階級別患者発生割合は1～4歳69%、5～9歳20%、0歳8%の順で多く、10歳未満の患者が全体の97%を占めていた。

図 25-1 感染性胃腸炎（病原体がロタウイルス）の週別定点あたり患者発生状況

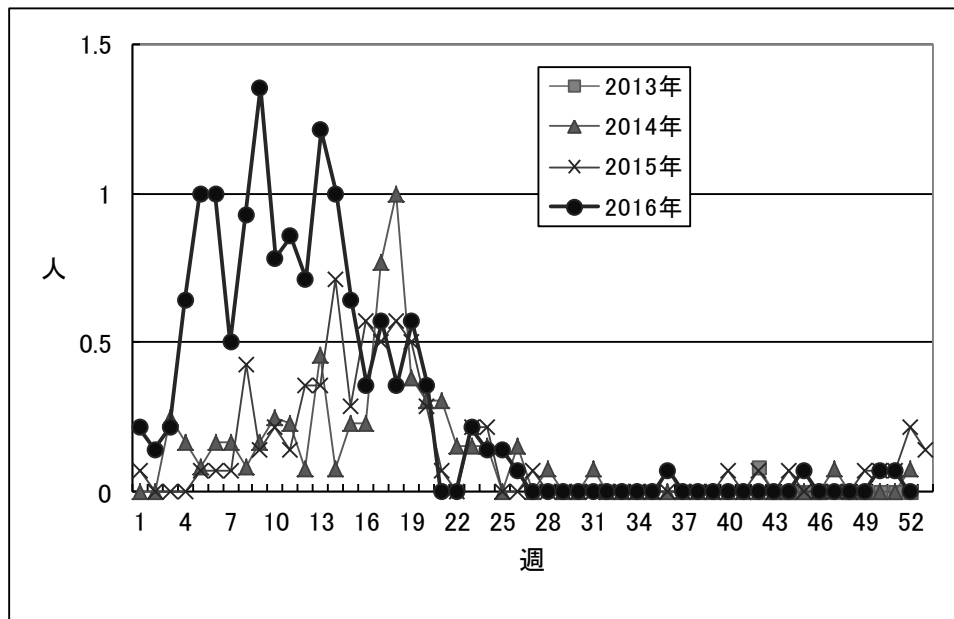


図 25-2 感染性胃腸炎（病原体がロタウイルス）の年齢階級別患者発生割合

